

2010年6月

太宰治『人間失格』白筆草稿・初版複製本展示

太宰治の遺体が玉川上水で発見されたのは62年前の6月19日、奇しくも彼の誕生日でした。以後6月19日は、短編「桜桃」にちなみ「桜桃忌」として三鷹の禅林寺などで催し物が毎年開かれています。昨年は、1909年生まれの作家、太宰治、松本清張、中島敦、埴谷雄高、大岡昇平などの生誕100年にあたりました。2010年の今年にかけて、「斜陽」「パンドラの匣」「ヴィヨンの妻」「人間失格」が映画化され、関連書籍も数多く出版されています。

今回展示の資料は、立教大学図書館所蔵の「人間失格草稿」（原稿用紙2枚）、「回想の太宰治」（津島美知子）、「愛は死と共に」（山崎富栄）、「太宰治」（大田静子）、また日本近代文学館による初版本の複製版などです。

これらの資料は、昨年11月、埼玉県浦和で埼玉県図書館協会主催「図書館と県民のつどい埼玉2009」の中でも展示されたものです。

立教大学図書館

<資料紹介>

【展示ケース（左）】

1. 太宰治『人間失格』草稿 159p, 160p
※筑摩書房200字詰め原稿用紙2枚、1999年立教大学に寄贈されたもの
2. 回想の太宰治 / 津島美知子著. -- 人文書院, 1978.5
(立教大学新座保存書庫 小田切文庫所蔵)
3. 愛は死と共に : 山崎富栄の手記 / 山崎富栄著. -- 石狩書房, 1948
(立教大学人文科学系図書館所蔵)
4. 太宰治 : 小説 / 太田静子著. -- ハマ書房, 1948.11
(立教大学新座保存書庫 小田切文庫所蔵)

【展示ケース（右）】

※これらの図書は、日本近代文学館『名著初版本複製太宰治文学館』の一部で、太宰の初版本を忠実に複製したものです。

1. 人間失格 / 太宰治著、筑摩書房 昭和23年刊 (日本近代文学館1992複製)
2. 東京八景 / 太宰治著、実業之日本社 昭和16年刊 (日本近代文学館1992複製)
3. 斜陽 / 太宰治著、新潮社 昭和22年刊 (日本近代文学館1992複製)
4. 女生徒:短篇集 / 太宰治著、砂子屋書房 昭和14年刊 (日本近代文学館1992複製)

【パネル】

1. 「人間失格の読者たち」石川巧 (立教大学図書館長、文学部教授)
2. 香山リカ「冷たい人なのに、好きになってしまう」
(『女が読む太宰治』ちくまプリマー新書109 筑摩書房 2009より抜粋)
3. 松本和也『昭和十年前後の太宰治 : 「青年」・メディア・テキスト』より抜粋、ひつじ書房, 2009.3

『人間失格』の読者たち

立教大学文学部教授・図書館長 石川 巧

放蕩生活に溺れたあげく、咯血、モルヒネ中毒、精神病棟への収容という転落コースをたどる主人公・大庭葉蔵が残した三つの手記に「はしがき」「あとがき」を加えて構成される「人間失格」（「展望」昭23・6～8、執筆は同年3～5月）は、第二回、第三回分の雑誌掲載が死後（昭23・6・13、山崎富栄と玉川上水に入水自殺）だったため、太宰治が自分の人生を回顧的に綴った「遺書」のように読まれる傾向があり、教育の現場からは遠ざけられてきた。

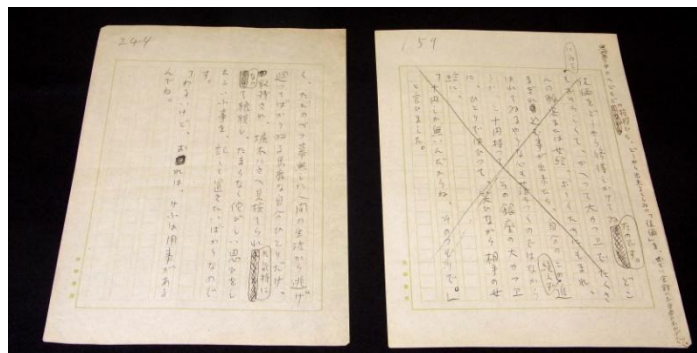
だが、長きにわたって人気を支えてきたのは中・高校生の読者たちであり、彼らの多様な読み方がこの作品の奥行きをつくりだしてきたともいえる。たとえば、昭和三十年代の読者は、人間のエゴイズムに傷つく主人公・葉蔵の純真さを擁護し、むしろ、彼を「虚偽」へと駆り立てる社会への憤りを語るようなヒューマニティ溢れる言葉を口にする。昭和四十年代に入ると主人公と読者との距離が著しく接近し、本心を欺きながら「道化」のように振る舞う葉蔵は私自身だという解釈が登場する。世間や他者との関係性のなかで生かされている「私」は贗物であり、本物の「私」は誰にも見られないようにひた隠しにされているのではないだろうかという自分自身への疑惑が、思春期にある中・高校生たちの心をくすぐるのである。なかには、葉蔵の生き方に高度経済成長期の世相に逆行する「下降志向」をみて彼の孤高性を称える言説も出てくるが、それも意味では読者たちが抱える現実の悩みや苦しみを反映したものであろう。

昭和四十年代後半になると、葉蔵の弱さ、優柔不断さを断罪して「ぼくたちは人間失格を読むことで、死へではなく生へ、力強い生へ向かわなくてはならない」と宣言するような文章が量産されてくる。いわゆる反面教師としての主人公像が確立されるのである。

また、その後、『人間失格』を賛否の形式で捉えることに飽きた読者たちは、作品の内容よりもその語り口に関心を持つようになり、「私」が「私」自身を語るという行為に含まれるかわしさを、他者を了解することの困難さ、ニヒリズムへの陶醉などを問題化しはじめる。『人間失格』は人間を了解不能な存在として描いているからこそ名作なのだ、というわけである。



『人間失格』の背後にはいつも太宰治がいた。そして物語のなかに現実よりも人間らしい人間を見つけた中・高校生たちは、ときに陶醉しときに反発しながら彼の文学にたらしこまれていった。この作品がいまもなお多くの読者を惹きつける理由は、好悪の振幅がとめどなく拡張していくところにあるのではないだろうか。



冷たい人なのに好きになってしまう

精神科医・立教大学現代心理学部教授 香山リカ

太宰治を「境界性パーソナリティ障害」と診断する論文を書いた精神科医・米倉育男は、彼の「道化」と呼ばれる、はしゃぎっぷりや悪ふざけは、「淋しさ、頼りなさ、空虚感などが入りまじった抑うつ的な感情を防衛するもの」だとしている。

では、なぜ太宰は、そんなことをしなければならぬほど寂しかったのだろうか。その問いに対して米倉は、「太宰の場合は、母からというよりは、長い間『生母』と考えていた叔母から見捨てられるのではないか、という分離不安に基づく防衛として考えることができよう」と分析している。・・・(「日本病跡学雑誌」19号1980)

「自分は特にすぐれた人間」と万能感を持ったかと思うと、次の瞬間には「自分は最悪の人間」と落ち込み、安定したペースで仕事をし続ける友人などに嫉妬の情を覚える。自嘲的に見せつつ、太宰が実は芥川賞などの社会的な評価に固執し、師であり賞の選考委員でもあった佐藤春夫に受賞を乞う手紙まで出したことも知られている。

こうした話をすると、とくに就職活動に勤しんでいる学年の男子学生たちは、大きくうなずく。彼らもまた、自信喪失や自己卑下と優越感や自負心とのはざまを揺れながら悩んでいるのだろう。

さて米倉育男は、その後太宰が持つ「自己愛性パーソナリティ者」としての一面にも注目する。米倉は、自己愛性パーソナリティ障害のなかでも「操縦型人格」に相当するのではないかと述べる。論文からその定義を引用しよう。「この型の人々は、自己中心的で自らの自己愛を満足させる手段としてのみ他人と付き合い、他人を思いどおりに操ろうとする。それは、決して相手への深い思いやりがあつてのことではなく、他人が自分に好意をもち、思いどおりになることで自己愛を満たそうとするものである。その人間関係は表面的で、他人への軽蔑感を抱いている。しかし、一見親切そうで温かみがあり、人の気を引いたり人使いがうまい。・・・」

女子学生たちに再度『人間失格』の主人公、あるいは太宰自身がなぜ女性をひきつけたかと質問してみる。すると、いろいろな答えが返ってくる。・・・多様な意見があるが、共通しているのは「冷たい人、決して幸せになれない人だとわかっているけど、こういう男性を好きになってしまう女性の気持ちはよくわかる」という点だ。・・・男子学生はポカンとした顔で見ているが、中にひとりふたり、うつむきながら含み笑いをしているように見える人もいる。この人たちこそ

現代版・太宰治なのだろうか、と息子ほど年の離れた彼らにドキリとさせられることもある。

(※『女が読む太宰治』筑摩書房2009より抜粋、転載させていただきました。立教大学図書館)



『昭和十年前後の太宰治』（ひつじ書房 2009）より

信州大学人文学部講師 松本和也（立教大学文学研究科卒）

太宰治は、しばしば現役作家であるといわれる。・・・例えば『人間失格』をはじめとする文庫本は、今なおよく売れているというし、若手を中心に現代作家の何人もが太宰治に影響を受けたと公言してはばからない。あるいは、中学・高校の国語教科書をひらけば、そこには「走れメロス」、「富嶽百景」、「津軽」といった太宰治の作品が教材として収められてもいる。・・・

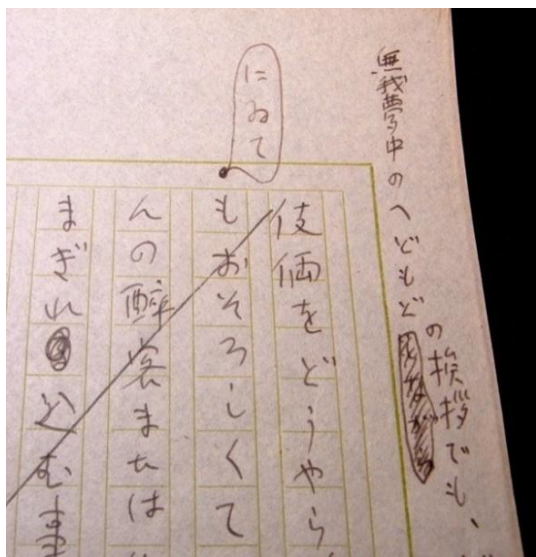
よく知られたいい方をあげておこなれば、太宰治は“青春のはしか”であるという。青年期には夢中になって太宰治の作品を読む時期があるが、大人になれば自然とそういう時期は去る、その意味で太宰治への心酔は一時的なはしかのようなものだ、というのがそれである。・・・

しかし、ここにも死角がある。確かに、人には誰しも青年期があり、それぞれの青春を生きるだろう。・・・とはいえ、それはいつの世でも、そこに太宰治なる作家がいて、その作品があれば成立したことだろうか。本書にいう死角とは、端的にはこのことに関わる歴史的な条件こそを指す。つまり、太宰治が“青年の文学”として読み継がれているのが一つの事実であるように、太宰治とは、ある歴史的時期に、ある歴史的文脈においてはじめて“青春の文学”とみなされていたこともまた確かなはずなのだ。・・・当時の、そして現在流通している太宰治とは、他のいつでもない昭和 10 年前後という歴史的条件を抜きにしては考えられない、というのが本書の基本的な立場である。・・・

社会学者の山本明は<<太宰の死後、今日までの読者>>について、生前の読者との違いにふれて次のように述べている。

「第一に、現在の読者は、太宰の生涯と太宰の作品を混同し、あるいは同一線上でとらえる人が大部分である。戦前の読者は太宰個人について、ほとんど何も知らない人ばかりであった。作品は自立して読まれていた。今日は太宰の生涯をたどりながら読む人が多い。作品と作者との関係は、いちど整理しなおす必要がある。」（『太宰神話の過去と現在』『国文学』1982.5）

太宰治と同じく第一回芥川賞候補となりながら落選した高見順などをその典型として、昭和 10 年前後の青年作家とは、それぞれの仕方ではあるが、左翼運動にコミットし、プロレタリア文学を書くことで主体形成してきた世代なのだ。・・・



本書で注目していきたいのは、太宰治を“青年の旗手”へとおしあげ、そして“青年の旗手”であるがゆえに、同時代メディアから退場を余儀なくされていく、他ならぬ昭和十年前後の動向である。

（※上記著書より、引用・抜粋させていただきました。立教大学図書館）

太宰治年譜

1909 (明治 42 年)	1 歳	6 月 19 日青森県北津軽郡金木村に、十子六男として生まれる。本名は津島修治。津島家は県内多額納税者 4 位の新興の商人地主。母のタ子(たね)が病弱のため、生後まもなく乳母をつけられ、叔母キエに育てられた。使用人を加えると 30 人の大家族だった。
1911(明 44)	2	夜は叔母キエと寝所を共にし、昼は年季奉公のタケ(13 歳)と過ごす。
1912(明 45)	3	父、源右衛門が衆議院議員選挙に当選。
1916(大 5)	7	金木第一尋常小学校に入学。小学校時代を通じて首席だった。
1922(大 11)	13	明治高等小学校に入学、1 年間通学。父、源右衛門が貴族院議員に当選。
1923(大 12)	14	父源右衛門が 52 歳で死去。4 月青森中学校に入学。在学中、級長をつとめる。
1925(大 14)	16	青森中学校の校友会誌に最初の創作「最後の太閤」を発表。長兄文治、町長となる。
1927(昭 2)	18	弘前高等学校に入学。7 月芥川の自殺に衝撃を受ける。学業を放棄して、義太夫を習い、花柳界に出入りし、芸妓小山初代と馴染みになる。
1929(昭 4)	20	急激に左翼思想的傾向を示すようになる。期末試験前夜にカルモチンを嚥下、第一回の自殺未遂事件を起こす。
1930(昭 5)	21	東京帝国大学仏文科に入学。5 月井伏鱒二に会い、以後師事する。非合法運動にシンパとして加わる。初代が出奔し上京。11 月カフェ女給の田辺あつみと心中をはかるが太宰のみ助かる。自殺幫助罪に問われるが起訴猶予。12 月初代と仮祝言を挙げる。
1931(昭 6)	22	初代と五反田の借家に同居する。資金カンパ、アジト提供など続ける。
1932(昭 7)	23	青森警察署の取り調べを受け、非合法活動と絶縁を誓約して帰京する。
1933(昭 8)	24	杉並区天沼に転居。「列車」を太宰治の筆名で発表。「魚服記」を「海豹」に発表。
1935(昭 10)	26	3 月在学 5 年目の東大を落第、都新聞入社試験にも失敗。鎌倉山中で縊死をはかる。4 月入院し鎮痛剤パピナルが習慣化する。5 月「道化の華」を発表、8 月「逆行」で第一回芥川賞候補となるが、落選。佐藤春夫に師事する。10 月「ダス・ゲマイネ」を「文芸春秋」に発表。川端康成の芥川賞選評への抗議を「文芸通信」に発表する。
1936(昭 11)	27	「めくら草紙」を「新潮」に発表。2 月パピナル中毒で入院。6 月「晩年」を刊行。井伏鱒二らのすすめで武蔵野病院に入院、中毒を根治して退院。
1937(昭 12)	28	「二十世紀旗手」を発表。初代の過ちを告げられ衝撃を受け、心中未遂事件を起こす。
1939(昭 14)	30	1 月杉並区天沼で、井伏夫妻の媒酌により石原美知子と結婚、甲府市御崎町に新居。「富嶽百景」を「文体」に、3 月「黄金風景」を「国民新聞」に、4 月「女生徒」を「文学界」に発表。9 月、東京府下三鷹村下連雀に転居。「おしゃれ童子」を「婦人画報」に発表。
1940(昭 15)	31	1 月「俗天使」を「新潮」に、2 月「駈け込み訴へ」を「中央公論」に発表。5 月「走れメロス」を「新潮」に、7 月「乞食学生」を「若草」に、11 月「きりぎりす」を「新潮」に発表。この年は原稿依頼も多く、安定した生活の中で多くの佳作を発表した。
1942(昭 17)	33	しばしば点呼召集され軍事教練を受ける。10 月「花火」が検閲により全文削除を命じられる。母危篤となり帰郷、12 月母死去。
1944(昭 19)	35	神奈川県下曾我村の太田静子を訪問。7 月初代死去。8 月長男誕生。
1945(昭 20)	36	妻子を甲府の石原家に疎開させる。7 月空襲で全焼。妻子とともに金木の生家に帰る。
1946(昭 21)	37	長兄が衆議院議員となる。6 月「パンドラの匣」刊行。11 月三鷹の旧居に帰る。
1947(昭 22)	38	2 月太田静子を訪ね日記を借りて静岡県三津浜で「斜陽」を起稿する。3 月「ヴィヨンの妻」を「展望」に発表、三鷹駅前の屋台で山崎富栄と知り合う。次女生まれる。6 月末三鷹で「斜陽」完成、8 月から「新潮」に連載。9 月仕事場を山崎富栄の部屋に移す。11 月太田静子に女兒誕生。12 月「斜陽」が刊行、ベストセラーとなる。
1948(昭 23)	39	1 月「如是我聞」を「新潮」に連載。3 月熱海で『人間失格』の執筆を始める。しばしば咯血。5 月「桜桃」を「世界」に発表、大宮市の小野沢方で『人間失格』を脱稿して帰京、『グッド・バイ』の執筆を始める。6 月「人間失格」第 1 回を「展望」に発表。12 日大宮の宇治病院と小野沢氏を訪ねる。13 日夜半から翌朝の間に山崎富栄と玉川浄水に入水。6 月 19 日早朝に遺体が発見される。21 日告別式、三鷹の黄檗宗禅林寺に葬られる。